

バスケットボール競技における ハンドオフの攻防に関する研究

コーチング研究領域

5022A081-1 森 一史

研究指導教員:倉石 平 教授

【緒言】

近年、戦術的重要性が高まっているハンドオフであるが、依然としてプレイ頻度の低さも指摘されている。また、ハンドオフに関する研究も、ゲーム分析の一項目として触れるに留まったもののや、日本における歴史的変遷を取り扱ったものに限られており、ゲーム場面におけるハンドオフの攻防に着目してその帰結や効果について検証した研究は見当たらない。

相対するディフェンス側の戦術に対して、オフense側がハンドオフをどのように活用し攻撃しているかを明らかにすることを目的とする。

【方法】

1. 対象

FIBA Americup 2022, FIBA Euro Basket 2022 の計 88 試合

2. 分析方法

Hudl Sportscodes を用い、タギングを行った。

3. 分析項目

Hand Off Area, Hand Off Spot, Hand Off Defense, Offense Shot Pattern, Offense Result の 5 項目について分析した。

4. 統計処理

統計ソフト IBM SPSS Statistics を用い、上位検定としてフィッシャーの正確確率検定を行い、有意差が認められた場合、下位検定として残差分析を行った。なお、有意水準は 5%未満とした。

【結果】

1) Hand Off Area

Hand Off Area は、ALL, Americup, Euro Basket のいずれにおいても 96%以上を High Area が占めた。

2) Hand Off Spot

Hand Off Spot は、ALL, Americup, Euro Basket のいずれにおいても Elbow が最多、次いで Top が多かった。また、Elbow, Top, Side の 3 つの Spot で全体の 70%以上を占めた。

3) Hand Off Defense

Hand Off Defense は、ALL, Americup, Euro Basket のいずれにおいても Contain, Through, Switch が全体の約 95%を占めた。Hard Show, Double Team は、両者合わせて 5%前後であった。

4) Hand Off Defense と Offense Shot Pattern の傾向

ALL, Americup, Euro Basket の Hand Off Defense と Offense Shot Pattern の傾向についてフィッシャーの正確確率検定を行った結果、有意差がみられた。有意差がみられたため下位検定として残差分析を行った。

(1) ALL

Contain において Screener が有意に多くなり、Handler が有意に少なくなった。また、Through において Handler が有意に多くなり、Screener, Kick Out が有意に少なくなった。また、Hard Show において Kick Out が有意に多くなり、Handler が有意に少なくなった。さらに、Double Team において Screener が有意に多くなり、Handler が有意に少なくなった。

(2) Americup

Contain において Screener が有意に多くなり、Handler が有意に少なくなった。また、Through において Handler が有意に多くなり、Screener が有意に少なくなった。さらに、Double Team において Handler が有意に少なくなった。

(3) Euro Basket

Contain において Screener が有意に多くなった。また、Through において Handler が有意に多くなり、Screener, Kick Out が有意に少なくなった。また、Hard Show において Kick Out が有意に多くなり、Handler が有意に少なくなった。さらに、Double Team において Screener が有意に多くなり、Handler が有意に少なくなった。

【考察】

1. Hand Off Area

ALL, Americup, Euro Basket のいずれにおいても 96%以上を High Area が占めたことから、より広いスペースを活用することを重視してハンドオフが行われていたと考えられる。

2. Hand Off Spot

ALL, Americup, Euro Basket のいずれにおいても Elbow が最多、次いで Top が多かった。また、Elbow, Top, Side の 3 つの Spot で全体の 70%以上を占めた。これらは、世界的にポピュラーな戦術となっている「5 Out」オフenseによるものと考えられる。

3. Hand Off Defense

ALL, Americup, Euro Basket のいずれにおいても Contain, Through, Switch が全体の約 95%を占めた。Contain はスクリーナーディフェンスの身体的負荷を考慮した場合、Through はハンドラーのショット成功を警戒する必要性が低い場合、Switch はディフェンスのプレイヤー間で体格または身体能力的差異が小さい場合に多用されたと考えられる。Hard Show, Double Team の割合の低さの要因としては、その特徴からハンドオフのスピードへの対応策として遂行することが困難であったことが考えられる。

4. Hand Off Defense と Offense Shot Pattern の傾向

Contain は、ハンドラーの攻撃を防ぐ止めることに注力した結果、Handler のプレイが少なくなり、並走する Screener のプレイが多くなったと考えられる。

Through は、他の方法に比べてハンドラーは比較的的自由になる。そのため、自らのショットを選択する割合が増え、Handler のプレイが多くなり、Screener や Kick Out へのパスが少なくなったと考えられる。また、Through されないためのスクリーナーの協力も必要であると考えられる。

Switch は、ハンドラーとスクリーナーのディフェンス間でマッチアップを入れ替えるだけであり、数的有利な状況を創り出すことができず、攻めあぐねたと考えられる。

Hard Show は、スクリーナーのディフェンスがハンドラーのドリブルによる進行を塞ぐように素早く飛び出す守り方であるため、ハンドラーはパスを選択せざるを得ない状況となる。そのため、Handler のプレイが少なくなり、Kick Out のプレイが多くなったと考えられる。

Double Team は、ボールマンを 2 人がかりで止める守り方であり、そのためスクリーナーがノー

マークとなる。その結果、Handler のプレイが少なくなり、Screener のプレイが多くなったと考えられる。

研究の限界として、ハンドオフに関わったプレイヤーがどのポジションであったのか、また、どのプレイヤーであったのかについての研究はできていない。今後は、ハンドオフについてポジション毎、また特定のプレイヤー毎について研究する必要がある。

【結論】

Hand Off Defense と Offense Shot Pattern の傾向についてフィッシャーの正確確率検定を行った結果、Switch においては有意差がみられなかったが、Contain, Through, Hard Show, Double Team においては有意差がみられた。有意差がみられたため残差分析を行った結果、Contain では Screener と Handler, Through では Handler と Screener, Kick Out, Hard Show では Kick Out と Handler, Double Team では Screener と Handler において有意差がみられた。

以上のことから、Hand Off Defense と Offense Shot Pattern には一定の傾向があることが分かったため、今後の指導の一助となるであろう。

しかしながら本研究においては、ハンドオフに関わったプレイヤーがどのポジションであったのか、また特定のプレイヤー毎についての研究はできていない。今後は、ハンドオフにどのポジションのプレイヤーが関わったのか、さらにハンドオフにおける特定のプレイヤーの関与について研究する必要がある、今後の課題としたい。